

お茶と日本人の心

武者小路千家第14代家元 千 宗守

みなさん、はじめまして。ようこそお見えいただきました。京都で茶の湯をいたしております、千宗守と申します。ただ今、私のご尊敬申し上げる畑田先生から、懇切なご紹介を賜りました。ちょっと座らせていただきます。私はどちらかというと、立った方が、話がし易いので、興がのってきますと立ち上がるかもしれません、気にしないでください。

この畑田家住宅は、国の登録有形文化財に登録されておまして、その活用・保存に尽力されておられることは、皆さんもよくご存じのことです。実は、京都にも、登録文化財の家がたくさんございまして、私どもの家も、そうでございますし、今日京都から来ていただいている私の友人の山口さんの家も登録されております。私共の家は4~500年の歴史がありますが、彼の家はもっと古くて600年以上です。ある有名な貴族のお家の領地を代官しておられた大変古いお家で、その遺構をお持ちです。ご本人は長らく東京におられたのですが、このごろこちらに帰って来られて家の保存活動にも力を入れておられます。それで、京都には京都府国登録文化財所有者の会というのがありまして、私がお会長、山口さんが副会長を努めております。実は、国登録文化財所有者の会は大阪の方が先行しておられて、その会長が、この畑田先生でございます。いつも、我々の会の集まりに来ていただきますので、仲良く気楽に付き合わせていただいております。

今日の会は、当初5月24日に予定をさせていただいていたのですが、例の新型インフルエンザの流行で中止のやむなきに到りまして、今日あらためて実施させていただくこととなった次第です。ただ、お天気を心配していたのです。私が京都を出るときは、真っ暗でした。これはもう3時過ぎから雨になるなと思っていたのですが、どういうわけか尻上がりに良くなって、この秋晴れです。まさに萬里無片雲（ばんりへんうんなし）という文言そのままの天気になってまいりました。これはひとえに、ご来会のみなさまと、このご当主の精進の良さによるものと、大変喜んでおります。この調子ですと、ずいぶん遅くまで明るうございますので、お急ぎ心も出ないと思います。いただいた時間は1時間少しでございますが、皆さま、荷物にはなりませんので、何かお持ち帰りいただけるお土産話があればよいなと思っております。よろしく願いいたします。

茶の湯は堺の落とし子

私、普段、茶の湯をやっておりますので、当然お話しすることも、茶の湯の話になるわけですが、実は、この地域と茶の湯は密接な関係がございます。と申しますのは、隣に堺という町がございます。政令指定都市になりましたから、区分けもされて、範囲もずいぶん広がったようでございますが、皆さま、案外、堺の本当の姿をご存じないかもしれません。堺と茶の湯との関係も、存外希薄に考えておられるようですが、堺という町がなかったら、茶の湯は絶対に今のかたちではなかったのです。というのは、堺は貿易港であり、鉄砲がいち早く入って来たところで、その生産ならびに販売に成功した町でございます。今の言葉で言えば軍需産業の先端のような町でしたから、もう、儲かって、



儲かってしょうがなかったのです。有り余るほどの財力、一説には、日本の富の9割以上が堺に集中していた時代もあったということで、その中に落とし子のようにできたのが、茶の湯でございます。

茶の湯と茶道

今は茶の湯のことを、茶道ともいいますが、古くは茶の湯と申しました。茶の湯と言った方が、歴史的に広い範囲を含むこととなりますので、今日のお話では、私は茶の湯という言葉を使いあげます。これは、みなさまご認識の、茶道（ちゃどう）、あるいは、茶道（さどう）、という語に置き換えて聞いていただいても、一向にかまいません。ただ、茶道（ちゃどう）、茶道（さどう）は、どちらかと言うと礼儀作法に重点を置いた言葉です。

湯相と炭点前

今日も午後から、こちらのお座敷をお借りして、臨時の茶のしつらえをいたしまして、皆さんに一服差しあげました。これは薄茶と申しまして、正式の茶会では、一番後に出てくるコース、お開きのコースです。利休が始めて、今、われわれが伝えております、わび茶というのは、フルコースでは4時間ほどかかります。今日は、畳の上に風炉という火元が置いてありますが、今ごろの季節からは、正式の茶室では炉というものを切りまして、畳の下に火元の炭が入ります。床の一部を切りあけて箱型にして炭火を貯えるのです。炭も、今日お見せしたものよりは、5分ほど大きい炭を使います。そこへ釜をかけるというかたちのスタイルです。したがって、その炭のおこしかたというのが、なかなか難しゅうございました。今ならもう、スイッチひとつ捻るだけで、時間がたてばお湯は簡単に沸き上がりますが、昔は火加減という言葉があったくらいです。



お茶を飲むときに、それを点てるお湯を最高の状態にしなくてはならない。日本をはじめとする、東洋の水は、ヨーロッパなどの水と違いまして、カルシウムを含んでおりませんので、沸騰を何回も重ねた方が、おいしいお湯になります。「老湯」、この老（おう）という字は、オールドという意味ではなくて、良い、グッドとかスキルとかいうような意味でして、老湯は非常に優れたお湯を指します。中国には、湯相という考え方があります。「ゆあい」と読む人もありますが、人相、世相の相と同じでございまして、湯相（ゆそう）といいます。お湯にも相があると言い伝えられてきておるのでございます。皆さん方、ティーバッグというのをお使いだと思えます。昔、リプトンの黄色いティーバッグの外装の袋の裏に、今はもう書いてありませんが、Use fresh boiling water と書いてありました。この fresh boiling water というのは、沸きたてのお湯、沸騰を何回も繰り返さないお湯という意味です。水の沸点は100度ですが、水を沸かして、沸騰したときの温度は98度前後です。ここで、火を止めて紅茶を入れると、一番おいしい紅茶をお楽しみいただけます、という意味です。

ところが、茶で使いますお湯は、湯相からいうと先ほど申し上げた老湯、沸騰を何度も繰り返したお湯でないと具合が悪い。沸騰を繰り返すうちに、余計な物がすっかり蒸発してしまって、ほんとに純粋な水だけになっているお湯がよいのです。カルシウムを含む水で沸騰を繰り返しますと、炭酸カルシウムが沈殿してきます。ヨーロッパのホテルなどで、蛇口に白い塊が付いているのをご存じと思います。あれが炭酸カルシウム、すなわち石灰石です。したがって、ヨーロッパでお茶を入れるとき

は、できるだけ沸騰したての、フレッシュなお湯の方が良いのです。しかし、東洋の水、特に日本の水は、沸騰を繰り返した老湯が良い。炭火を使う場合は、沸騰を何回も繰り返させるために、炭のつぎ方にも細かい工夫が要ります。先ほどは、私が 10 年間ご奉仕をして、お世話になっておりました帝塚山学院大学の茶道部の皆さんに、ちょうど、お近くですので協力をさせていただいて、お茶席のほうをやっていただきました。茶道部の若い人たちが、お茶を点てる仕種をしてくれて、皆さんにご覧いただいたのですが、これは薄茶点前と申します。他に、炭点前というのがあります。お湯を沸かす炭にも、先ほど申し上げましたように、良いお湯を作るために、工夫がしてあります。いろいろな形の炭が組み合わせてあるのです。太い炭、丸い炭、丸いのを半分にした炭、筒状の炭、車の形をした炭などがあり、それらを交互に組み合わせることによって、適切な湯相のお湯を沸かすことが出来ます。このあたりは、存外、自然科学的なのです。炭の組み方で、論文を発表している理学部出身のお茶の先生もおられるくらいです。炭というのは非常に難しいのです。

お茶事の楽しみ

正式なお茶会では、最初に炭点前をいたしまして、そのあとすぐにお茶をするかというところではなくて、1 時間半ぐらいかけて懐石料理をいただきます。昔は一汁三菜の質素なものでしたが、今はもう、お茶席の懐石料理は日本料理の花形のように言われておりまして、例のミシュランの本で、上位を占めるような日本料理店は、殆どすべて、茶の湯の懐石料理からあそこまでになったお店ばかりでございます。そんなわけで大変豪華な料理ですから、食べるのに 1 時間半ないし 2 時間かかります。お茶会の半分ぐらいの時間を、食事とお酒を飲むのに費やすわけです。それは何故かと申しますと、一つは炭点前の後からお湯が何回も沸騰を繰り返すためには、時間が要するという事です。それと同時に、舌の状態を、懐石料理をいただいている間に、濃茶を飲むのに一番良い状態にしておくという意味もあるのです。お酒を飲み、ご馳走を食べる、そしてそのあとの濃茶が、最高の味になるようにするのです。いわゆるプロセスに、長い時間をかけるのが、茶の湯なのです。

濃茶を飲む量は、わずか 3 口半ぐらいですから、コップに半分ぐらいだと思います。濃茶を飲まれた方は、あまりおられないかも知れませんが、今日みなさんが飲まれた薄茶の 5 倍ないし、6、7 倍の濃さのお茶であります。すごく濃いお茶ですから、空腹の状態でも濃茶だけを飲むと、胸が悪くなります。それで、食事をせずに濃茶を飲むときは、普通、大きな主菓子（おもがし、お茶をより美味しくいただくための生菓子）を一つ食べます。先ほど、薄茶の前に差し上げたお菓子も美味しかったです。あれは、大阪の、あるお菓子屋さん、特別に頼んで作ってもらったものです。薄茶だったらあれでいいのですが、濃茶ですと、あれくらいではとても足りない。きんとうんなどの、もっと、どっしりしたのを食べないと、お茶が胸にもたれます。だから濃茶は、ご馳走を食べたあとが一番いいのです。西洋料理でも、最後に紅茶かコーヒーを飲むでしょう。あれ本当はコーヒーの方がおいしい、コーヒーが正式なのです。



洋の東西を問わず、ご馳走のあとは濃いお茶の方が美味しい筈です。懐石料理の後の濃茶もそれと同じなのです。舌の状態を、最高に贅沢にしておいて、あの濃いお茶を飲むと、舌で甘さを感じる部分が、本当の素晴らしい甘さを感じてくれる。砂糖を舐めたときに感じるような単純な甘さではありません。本当に美味しいときや、ものを嘗めるときに、甘露、甘露と申しますでしょう。甘露、甘露、まさにこの甘露の味がするのです。何とも言えない、最高の甘味です。これが懐石料理の後で、濃茶を飲んだときするわけで、本当に満足します。しかし、どうしても濃いお茶ですから、舌にその濃いお茶の味が残ります。その口直しをするために、皆さんに今日、ご体験いただいた薄茶を飲むのです。そうすると、また、あの薄茶が何ともいえず、さらっとして美味しいのです。そして舌の方も、その濃茶の濃い部分のものが、全部溶けてお腹に入ってしまって、口元もさっぱりして、一回の茶事が終わるといふかたちになります。非常に合理的というか、よく考えられていて、精神的にも満足させてくれますが、物理的にも味覚的にも満足させるようにできているのが、今の茶の湯です。

お茶の行儀作法とは

それでは、どうしてもそういう茶の湯ができあがったか、というお話をさせていただきます。これが、今日のお話の本題です。先ほども言いましたが、茶の湯は決して礼儀作法ではありません。例えば、昔、畳の縁（へり）を踏んではいけないという教えがありました。お母様あたりから、言われた方も多いと思います。今の人にこんなことを言っても、なかなか聞いてくれません。平気で踏んでおります。ただ、何故、畳の縁を踏んではいけないのかご存じですか。いろいろな説があつて面白いのです。畳と畳の間から刀が出てきて、殺されるからというのもその一つです。でも、刀はその気になれば、畳の何処からでも出せます。畳の縁が減って困るというのも考えられないことではありません。お茶の先生も、初歩の方には「畳の縁を踏んではいけない、行儀が悪い」と教えておられるかも知れません。畳は1畳6歩で歩け、というのも、茶室での基本です。その歩き方をしておれば、縁を踏むことにはならない。それでは何故畳の縁を踏んではいけないかということですが、ひと昔前は、床に畳を敷き詰めるということはなかったのです。上げ畳といいまして、人が常住坐臥するところだけ敷いてあって、他は板張りでした。今でもお寺、特に京都の禅寺などに行きますと、板張りでしょう。昔、日本の住居の床は、板張りが普通でした。やがてイグサを使って、畳が作られるようになりました。最初は、板張りの床の上に一人分、1畳だけを敷いていたのです。人が5人いたら、5枚敷いたのです。それも身分の高い人にだけです。その頃の畳は今で言えば、ペルシャじゅうたんのようなものでした。でも、厚さは今の畳の倍ぐらいあったのです。平安時代には、女性の着物の裾が、十二単をはじめとして沢山重なっていて、今のように軽快な格好ではありませんので、あれで畳の縁を踏むと、ひっくり返る恐れがありました。実際、多くの人がひっくり返ったと思います。運の悪い人は、頭を打って死んだかもしれませぬ。事故が多かったのです。それで、「畳の縁を踏んじゃ危ないよ」という教えができたのです。それが、「畳の縁を踏んじゃいけないよ」になったのです。やがてイグサの栽培法が改良されて、沢山採れるようになって、床全面に畳が敷かれるようになりました。それでも、上げ畳の時代が長かったもので、「畳の縁を踏んじゃいけないよ」という教えだけが残ったわけです。

だからといって、この教えの意味がなくなったわけではありません。いろいろな動作をする時に、日本人の体格ですと1畳6歩で歩くと、上体が揺れずに、安全に移動できるのです。例えば茶の湯では、先ほども見ていただいたと思いますが、手に持っているものがあまり揺れると好ましくない、手に持っているものが静止した形でないと具合悪いのです。それには、大股で歩いてはいけないし、

あまり小股でも歩きにくい。1 畳 6 歩ぐらいが丁度よいのです。それで、1 畳を 6 歩で歩くという教えが広まりました。それが丁度畳のへりを踏まない歩き方にもなるのです。1 畳 6 歩の歩き方を教えるのに、畳の縁を踏んじゃいけないよ、というのが便利だったのです。畳の縁を踏まないように歩けば、1 畳 6 歩で歩けますよ、ということになったわけです。だから、畳の縁を踏んじゃいけないよ、という教えは、もう形骸化しているともいえます。今は、踏んでも、どうということはないのです。ただ、畳のへりを覆っている材料は非常に薄いですから、あまり摩擦すると、早く痛みます。踏まない方が良いのは間違いありません。だから、畳の縁を踏むなという教えは、完全に形骸化したわけではなく、最初とは全く違う意味をもって生きているのです。

事ほど左様に、日本で礼儀作法といわれているものには、もう形骸化しているものが非常に多いのです。勿論、そうでないものもあります。例えば、建具の開け閉めですが、よく、建具を立ったまま開け閉めしてはいけないといわれます。行儀が悪いといって怒られます。これは行儀が悪いから、いけないのではないのです。実は、立って開けますと、建具を開け閉めするために横向きにかけているつもりの力が、縦向きにもかかって、敷居が早く減ったり、建具の敷居に接する部分が片減りしたりするのです。座って建具を動かすと、かけた力の大部分が、横向きにかかって、建具の特定の部分だけが敷居をこするといようなことはなくなって、建具の摩擦による減りも万遍になり、片減りしなくなります。建具の開け閉めは座って、という教えは、行儀の問題ではなく、自然科学から見て極めて合理的な考え方なのです。それがいつの間にか、行儀にすり替わったのです。

茶道と儒教思想

江戸時代の後期には、いろいろなことが全て行儀に結び付けられるようになります。喜び、悲しみ、楽しみ、苦痛といったものに表面上は無関心を装うといえますか、あるいは苦楽を超越した禁欲・冷静さというか、いわゆるストイックになってきたのです。この様な傾向は、この時代に儒教思想に裏打ちされて大成した武士道、すなわち武士階級の道徳と深く関係しております。以前は、武士たちは、戦争が仕事だったのです。その時代は、武士道というような難しいことは言いませんでした。別に、後ろから切りつけるとか、闇討ちをするのを卑怯だとは誰も言わなかった。そんなことは武士のすることではない、規則違反だ、行儀が悪い、とは考えなかったのです。信長なんて、江戸の後期の考えからすれば、ひどいことばかりしているじゃないですか。戦国時代の武将は殆ど全てそうです。ところが、江戸の後期のように平和になると、武士たちが非常に温和になり、官僚化されてきて、全てがストイックになってきたのです。そして、最後には何事にも「道」という語が付くようになります。茶の湯であったのが、道が付いて茶道、剣術は剣道、柔（やわら）は柔道となります。立花（りっか）、今の生け花ですが、これが華道になりました。とにかく、全部、道を付けてしまうわけです。この様な傾向には、江戸の中期以降、一般社会に浸透し、武士たちの教育の基本理念となった儒教思想が深く関わっています。皆が、物事を非常にストイックに考えるようになったのです。長幼の序をうるさく言うなどはその一つです。

儒教道徳の戒律の影響は、今でも韓国には多く残っております。「同姓は娶らず」などはその典型的な例です。また、韓国には、核家族が少なく、大家族で暮らすことが多い。だから、寝るときにはご両親に、「おやすみなさい」と言う、若い人、若い夫婦がお父さん、お母さんに「これから休ませていただきます」ときっちり挨拶するのです。若い人たちは、両親たちの面倒をよくみます。これは私の勝手な推測ではありません。先ほど今日の参加者の一人の韓国の女性の方が「そのとおりです」と認めて下さいました。私どもも両親と同居していましたが、そんな挨拶は全然しませんでした。両

親とは無関係に、勝手に寝て、勝手に起きていた。それが今の日本です。私は、今の韓国に残るこれらの生活規律を、日本では失われた美しいものだと思っています。

ところで、江戸時代は人を厳格に律するという生活規律が世の中に行き渡っていました。これは、徳川幕府が、韓国、当時の朝鮮の儒教思想とそれに基づく戒律をしっかりと取り入れていたからです。鎖国中とはいえ、朝鮮の様子は、朝鮮通信使を通して、学んでいたのです。そして、儒教の考え方を武士の教育の基本にしました。朝鮮は、こういう点で、日本から見て先進国でした。物事に、道という語を付けて、厳しく律する。そうでもしないと、世の中がすごく平和になって、もう実践のような厳しい環境で生活の規律を学ぶというような機会がなくなってしまったのです。たとえば、剣道にしても、戦国時代なら、もう明日は、血刀引っさげて出かけていくという状況ですから、戒律は実戦で体験的に学ぶことが出来ます。ところが、平和で戦争など無い時代には、どうして学ばせるかといえ、一つの厳密なカリキュラムをしっかりと作って、教えていくという方法しかないわけです。そういう厳しいやり方でないと誰もついてこない。それで、長幼の序というようなことを、やかましく言うようになったのです。

これからお話する茶の湯の歴史も、実は、非常に血なまぐさいところから始まっているのです。そのお話は後でいたしますが、江戸時代の後期には、そんな血なまぐさい茶の湯などはもう、実現しなかったわけです。それで、茶道ということにして、まず形から入る、形をしっかりとつくっておく、例えば、歩き方一つをとっても、畳のへりを踏むなどと言った方が、教えやすく、学びやすいわけです。一事が万事、言葉は良くないかも知れませんが、縛るような形で教えていったのです。それが今の茶道です。一般的に言えば芸道です。

堺という町

先ほど私、血なまぐさいという言葉を使いました。表現がちょっと、きつかったかもしれませんが、今の形の茶の湯は、本当に血なまぐさい歴史とともに堺で始まりました。堺という町が茶の湯を今の形にしたのです。この町はポルトガル人が持ち込んだ鉄砲を大量に作り、販売するノウハウを持っていたのです。貿易港であり、且つ農機具などをつくるための知識と技術、すなわち鉄鋼業ともいえる鉄砲をつくるための下地がありました。この辺は、当時、大変な先進地でした。日本開闢以来というか、古代開闢以来、奈良盆地を中心に沢山の都があったところです。中国や朝鮮から入ってきたものを、今の竹内街道を通して、奈良盆地の方へ運んでいきました。竹内街道というのは日本で最初の国道です。だから、この辺は、今で言うと、東海道新幹線も通っているし、成田空港や関西空港もあるというような、最新の地域であったわけです。鉄鋼業だけではなくて、着物を染める染色工場もありました。当時、染料の原料に硝石を使っていたのですが、これは日本にはないので、中国から輸入していました。それを、堺は染色工場のために大量にストックしていました。ですから、鉄砲とその玉、鉛の玉を作る材料も技術も充分で、火薬の原料である硝石のストックがあって、火薬を大量につくることができた。鉄砲に関するソフトとハードを同時につくることのできたのが、堺だったので、堺は一大軍需産業都市になったわけです。

戦国時代は、もう毎日が戦争の世の中でしたから、最新兵器の鉄砲は、皆、のどから手が出るほど欲しい。それで、堺をめぐるいろいろな攻防が繰り返されます。わけても、後に天下統一の一手手前までいく織田信長、大変人気があった武将ですが、この人が堺に一番目をつけたわけです。というのは、信長ほど、鉄砲を、戦いに機能的、且つ大量に使った大名はいないのです。彼は、それによって、天下統一へ、一番乗りを目指した優勝候補の筆頭であったわけです。その信長が堺の武器生産能

力と、それで蓄積した有り余るほどの富に目をつけて、融資させるわけです。融資というよりは、分取りに近かったのかも知れません。信長は、自分のものにしたいという場合は、通常は、綿密な作戦を立てて、武力で圧倒するのですが、この方法は堺には通用しなかった。堺は特別な都市でして、防衛力も満点だったわけです。当時は、もう負けていく大名が多いわけですから、世の中に浪人が溢れていた。堺は、その浪人たちの中の、腕っ節の立つのを、有り余るお金で雇って、いっぱいある武器とともに、兵力も蓄えていたのです。堺は、信長が攻めたら損だなと思うだけの兵力も保持していたのです。信長は当時 5 万から 6 万ぐらいは兵を持っていたと言われていました。でも、信長の兵隊は、大部分、普段はお百姓さんをしていて、戦のときだけ兵隊になる、いうなれば、即席の兵隊ですから、そんなに強いのはいません。一方、堺の雇った兵隊は、一騎当千の侍大将クラスの武将ばかりでこれが最新の兵器を持っているわけですから、1人で10~20人ぐらいは平気で相手にします。そうすると、1,000人でも2、3万の軍隊のパワーになります。それで、持っている兵器が最新のものということになれば、今の国際社会でいう抑止力が、かなりはたらくわけです。さすがの信長も、力攻めするわけにはいかない。それをして、たとえ勝つことが出来ても、自分達も回復不可能なほどのダメージを受ける可能性があります。それでは武力行使ができない。今、核兵器を数発持っている国を、非常に大きな国でも、武力で攻めるようなことはしない。見事に抑止力が働いている。これと同じ状態が堺であったわけです。それでは、どうしたらいいか、堺をなんとかしてこちらへなびかせたい、そこで信長が思いついたのが茶の湯です。

茶の湯のはじまりと禅

戦国時代、堺の町には、今の茶の湯の原型があったのです。それは禅宗との関係においてです。禅宗は鎌倉時代に日本に入ってきます。実は、禅宗と一緒に、今の茶の湯の原型が中国の宋から入ってきたのです。禅宗では、座禅をいたします。今お話を聞いていただいている方の中に、座禅をなさった方はおられないかもしれませんが、座禅は、ヨーガから発展しもので、結跏趺（けっかふ）という特別な方法で足を組んで座りますので、最初は体も痛くなります。ちょっと足の太い人などはかなり痛いのですが、慣れるとそうでなくなる。ベテランの禅宗のお坊さんですと、座って1、2分もすれば、心拍数や血圧が、すうっと低くなっていきます。ところが初歩の人はそうはいかない。足は痛い、落ち着かない、暑いで大変です。しかし、やがて慣れてくると禅宗のお坊さんと同じようになる。だけど、いつまで経っても慣れないのが、睡魔との戦いです。座禅中に眠りという誘惑に打ち勝つのは非常に難しいのです。人間の欲望の中で、睡眠欲というのが一番強いといわれています。まさにそれなのです。一番きびしい拷問は、眠らさないことだといわれます。天井も壁も床も真っ白い部屋に1人置いて、サーチライトを浴びせて、眠らせないというような拷問です。禅宗の、本当の修行には、1週間近く、不眠不休で、トイレに行くのと、お湯を冷ましたものを飲むぐらいで、あとは不眠不休で座る荒行があるのです。そういうときは、もう本当に睡魔との闘いになるわけです。寝てしまっただけではしょうがないので、何とかこれを防ぐ方法はないかと考えて、生活習慣から見つけ出したのが、抹茶を飲むということだったのです。抹茶は、番茶、煎茶、ウーロン茶など茶の葉を熱湯で抽出する普通のお茶と違って、茶の葉を粉にして、それを、お湯と攪拌して懸濁させたものを飲むわけですから、茶の葉をすべて食べていることになります。地方によっては、茶の葉が美味しいといって、お茶を出した後の葉っぱを料理するところもあります。それぐらい茶の葉は食物としても栄養のあるものなのです。抹茶は、それを全部食べてしまうわけです。栄養もありますが、カフェインを大量に摂取することになります。濃いお茶を飲むと、なかなか寝られないのは、カフェインの所為です。

自分の息子が、まだ5つか6つのころに、濃い茶を飲ませたら、一晚中眠らずに、走り回っておりました。医者から、えらく怒られたのですが、それぐらいカフェインの作用は強いのです。ですから、不眠不休の座禅では、抹茶を一定時間ごとに飲むのです。不眠不休の座禅といっても、時々少し休憩をして、足を伸ばしたり、生理現象を果たしたり、お湯を飲んだりするのですが、その間に、みなが集まって、自分が座禅をしている間に、いろいろ疑問に思ったことを少し口に出して、先輩たちと意見交換をするのです。座禅中は一切口を開きませんが、この短い意見交換の時間を、茶禮（されい）と言っております。難しい方の禮を書きます。このときに抹茶を飲み、ディスカッションができる。そして、リフレッシュして、また座る、というふうに座禅は、一種カリキュラム化されていたのです。抹茶は禅宗の教材であったというわけです。

禅宗は、鎌倉時代のはじめに、中国の宋に留学した栄西によって、新しい宗教としてわが国に伝えられました。その際、お茶も持ちかえたのです。栄西が、お茶の効用、製法などについて記した『喫茶養生記（きっさようじょうき）』は、わが国最初の本格的なお茶関連の本といわれています。ところで、禅宗は、それまでの仏教とは考え方が根本的に違いまして、祈祷とか、祈りごとは一切しないのです。ただただ、座禅をして、自分自身の力で悩みを解決する。自立本願です。他力本願ではなくて、自力本願、腕っ節だけでやるという武士の生き方にぴったりです。貴族が問題にするような伝統、格式、家柄、そういうものには一切関係がありません。この禅宗の根本原理は、あくまでも自分の腕っ節で、のし上がっていくという武士の人生観、生き方と合致したものであったので、両者が融合して、明治に至るまでその後の時代を支配する武士たちの社会通念となります。武士たちが禅宗に非常にフリークになる、夢中になるのです。これが、その後禅宗が、わりと力を伸ばすことになった理由です。

禅宗の普及に伴って、抹茶も、上級武士階級、すなわち支配者層の武士階級ならびに禅宗の集まりで、よく飲まれるようになり、それがやがて他の階層の人たちにも、広がっていったのです。そういう意味では、抹茶はあくまでも、補助教材、ならびにお薬であったわけです。同時に禅宗にとっては、なくてはならないものでもあったわけです。お茶はそういう経緯で日本に伝えられたので、最初は食べ物でもないし、嗜好品でもなく、特殊なものであったわけです。1杯のお茶を飲んで意見を交換し合う、交渉、折衝、談判をするという、その形式が何と言いますか、日本人にとっては非常に珍しかったのです。それで抹茶をのむ習慣が、禅宗の範囲を越えて、一般社会に広がっていったのだと思います。禅宗の寺院だけでは、抹茶はそれほど普及しなかったでしょう。

茶の湯の機能性と茶室の起こり

当時、日本人は、意志疎通の手段として、文語体で文章を交わしたのです。五、七、五、七、七形式の和歌で自分の気持ちを詠んで、相手に伝えました。特に、京都の朝廷などでは、例えば天皇は、自ら姿も御簾の内というように、簾があって、その内におられます。政（まつりごと）をするときでも、貴族たちが家格の順に並んでいて、天子様は一言も発せられない。自分のお気持ちは歌で詠まれる、それを承ったものが臣下に伝える。臣下の者も上奏するときは、天皇陛下と言葉を交わすようなことは、絶対にしない。自分の気持ちを歌で書いて差し上げる、それに対する返歌をいただくというような、非常に文語体の世界であったわけです。私は、今皆さんにお話をしております。これが大学であれば講義ですし、ここですと講演ということになります。英語ではスピーチと言いますが、このスピーチという習慣が当時の日本にはなかったのです。言葉で人を説得するのは、あまり高級なことではない、レベルの高い人は、文章でもって人を感服させるものだというわけです。ましてや、口約

東で商談をするというようなことは、考えられもしなかったわけです。

しかし、中国から入ってきた禅宗の世界では、自分の意思を口頭で伝え、相手の意思を口頭で受け取り、そして次へ進むというやり方、すなわち議論をします。それが、禅宗の世界では、問答といひまして非常に大事なことです。禅宗では、僧堂という学校があり、そこで何をしているかという、朝から掃除をしたり、炊事をしたり、日常生活のことを全部やるわけです。その合間にお師匠さんと問答をする。何か命題を与えられると、それを、掃除をしながら、洗濯をしながら、ご飯をつくりながら、また場合によっては、これは「通す」といって大事なことなのですが、うんちをしながらも考えるのです。禅宗では全てのことが修行なのです、うんちしながらでも、おしっこしながらでも、命題を考えているわけです。そして、師匠から来いという合図があると、答えを持っていく、そしてお師匠さんとやり合いをするわけです、でも、なかなか OK は出してくれない、それを何度も繰り返すのです。すごい討論をするわけですよ。それが実は、禅宗の一番大事な修行なのです。こんなことは、それまでの日本にはなかったことです。

禅宗のこの考え方に目を付けたのが、実は、堺商人だったのです。商売では、歌をやり取りするようなまどろっこしいことはしてはならない。相手の機を見なくてはならないし、外国人が相手なら、外国語を使わなければならないし、ネゴシエーションもしなければならない。でも、日本にはそういう習慣はないし、学ぶ場所もない。ところが禅宗にはそれがあったわけです。禅宗は、当時、中国から伝わった最新の宗派でしたから、それを学ぶには常に中国と連絡を取らなくてはならない。優秀な老師といわれる指導者たちは、全部中国から招かなくてはならない、仏典も中国から最新のものを取り寄せなくてはならない。堺という貿易港に拠点を持っている堺の商人にはそれが比較的容易に出来たのです。堺には、当時すでに禅宗寺院があったのです。南宗寺といって、私たち茶の湯と関係の深い京都の大徳寺の末寺です。南宗寺は皆さまご存じのように、今も堺にあります。堺の商人たちはこの南宗寺に、しげく出入りをして、勉強をしました。最初は、何を勉強したかということ中国の言葉です。貿易商人は、相手の国の言葉を知り、それに熟達していないと駄目です。中国の言葉はご存じのように、中国の中でも場所によって違います。北京の言葉、上海の言葉、奥地の言葉、みな違うのです。日本みたいに、どこでも一つの言葉が通用するというわけではありません。また、時代が変わると変わります。当時は、明の言葉が一番大事でした。その明の最新の中国語を知っているのが、禅宗のお坊さんです。明から来ているお坊さんもいたのです。だから、当時の南宗寺は、今でいう外国語大学の役割を果たしていたのです。南宗寺には外国語大学の教授級のお坊さんが沢山いて、商人たちは、そういう人たちに言葉のレッスンを受けていたわけです。

でも、禅宗の方でも、「ええとこ取り」だけされてはかきません。宗教では、いずれにせよ布教ということが大事です。後のキリスト教ほどではないにしても、禅宗も布教のために頑張っていたのです。それで、堺の商人たちにも禅宗の修行する機会を与えるわけです。そうすると、堺の商人たちが、先ほどお話しした茶禮を見て、茶禮の持つ交渉性、議論性に、いち早く目をつけたのです。一碗の茶を飲みながら、相手の意見を聞き、こちらの意見も言う、そして交渉をする。このスタイル、こういうやり方は、「なかなかいけるぜ」ということになりました。それで、ひとかどの堺の商人は全て、自分の屋敷の中に、4 畳半くらいのスペースの部屋を持ちまして、そこを“茶禮”専用の部屋にしたのです。これが、堺における茶室の始まりです。彼らは貿易商ですから珍しい美術品はたくさん持っています。それらを上手に使って、人を呼んでお茶を飲んで、いろいろと相談事をしたのです。堺の商人は、お茶の礼儀作法とか、基礎とかよりも、茶の湯の持つ、寄り合い性というか、議論性というか、人が集まって一つの別世界をつくるという機能、あえて機能という言葉を使いますが、茶の湯の

機能性に注目したわけです。堺の町では、15世紀後半から16世紀初頭には、もう、茶室の中でいろいろな相談事をするというやり方が、常識になっていました。

信長、秀吉と堺を繋いだ茶の湯

ここで話を信長に戻しますが、彼はもう抜群の知能の持主ですから、堺に対して力攻めは通用しないと悟ると、この堺の茶の湯に目をつけたのです。信長が生まれたところは、今の名古屋の少し東側を流れる木曾川の近くです。木曾川は、当時も非常に流通の盛んなところで、それが注ぐ伊勢湾も、また流通が激しいところですよ。ある意味では堺と似たような場所です。そんなわけで、信長は堺の商人たちとよく似た感覚を持っていたわけです。あの、新規の商人も自由に営業できる楽市楽座をつかったことでもわかりますが、非常に数理的で、経済感覚に明るかった。自由に通商をさせないとは、絶対に経済的繁栄はないという考え方です。これは、堺と同じ考え方です。信長は、堺の商人たちが、お茶の集まりをして、そこでいろいろな物事を決めているということに、いち早く気が付くわけです。そして、堺の商人たちを相手にするには、自分も茶の湯をした方が良く、自分が茶の湯をすれば、彼らもこちらを向いてくれるに違いないと思ひ、茶の湯を始めます。果たせるかな、これによって信長は成功をおさめるわけです。これには、信長が新しいもの好きであったということも幸いしております。

それまでの信長の家来は、みな腕力にものをいわせる、首を何個取って給料がいくらというような連中ばかりでしたが、茶の湯を始めてからは、明智光秀や細川幽斎など、信長より血筋が正しく、鎌倉幕府創建以来の、名門の大名たちの子孫を、自分の配下に付けます。もちろん、光秀などは、作戦の武将としても一流でしたが、文化人としても大変優れておりましたから、茶の湯のコーディネートをしたり、和歌を詠んだり、また、京都の朝廷との交渉に、いろいろ煩雑なことがありますから、そういうことのために雇い入れたわけです。それで、信長も盛んに茶会をします。京都でもするし、堺にも自分が行って茶会をします。また、堺の商人たちの茶の湯も受ける。そのようにして堺の人たちとコミュニケーションを深めていきました。そして、ほんの1年か2年の間に度々茶会を行って、堺の商人たちの心をつかみ、もちろん武将のことですから脅しもしたとは思いますが、最終的には、堺は、信長に天下を取らせることとなります。これは、堺にとっては、えらく傲慢不遜な言い方と思われる方がおられるかもしれませんが、堺というのはそういう町だったのです。次は誰に天下を取らせるかということが考えられるし、また、それを実行できた町なのです。何故かということ、最新の優秀な武器と資金を大量に供給できたからです。今の銀行と同じとか、それよりも、もっと徹底していたかも知れません。信長に武器を渡して、天下を取らせるということで、衆意一致していたわけです。信長も勿論そのつもりで、現に、もう90パーセント以上成功していたところで、ご承知のように明智光秀のクーデターに遭って、あえなく散ってしまいます。そのあとを襲ったのが、豊臣秀吉です。この秀吉という人は、なかなかの努力家で、歴史上誉められておりますが、冷静に見てみますと、信長が完成近くまでやっていたことを徹底的に完遂したのです。その下地は全部信長がやっておいてくれた。それを徹底的に踏襲し、完成させたのです。秀吉が、堺の武器生産力、ならびに資金力を全部使いたいと思うのは当然です。幸い、若いころから、利休とは意志を通じておりましたので、利休を引き立て、彼を堺側の特命全権大使にし、自分が利休と直接交渉することで、堺の武器生産能力と資金力をフルに生かして、あの豊臣政権をつくり上げました。その最後の方では、秀吉はもう戦争をしません。いわゆる、孫子の言う、武力を用いずして相手を自分のものにする、一滴の血も流さずに、相手を自分に引き込むという作戦を、茶の湯を使ってするわけです。あの伊達政宗のと

きもそうでしたし、島津のときもそうです。そのようにして、かたちの上では、全部の大名が秀吉の傘下に入りました。そういうところでは、もう一滴の血も流していない。全部、茶の湯の席にあらかじめ呼んで根回しをしておいて、公式の場に出てきたときに秀吉の傘下に入れるというやり方です。だから、秀吉の晩年には、利休の茶の湯というのは、もう秀吉自身がする茶の湯というふうになっていました。そこへ集まる人たちは、その後、歴史に名を残す大名たちや豪商たち、または政治僧でした。禅僧で大名でもあった安国寺恵瓊というような人たちがずらっとそろっていました。そのために、利休は機密をたくさん握ることになります。もう晩年は、利休でないと秀吉にものを言えないというような状態になっておりました。ひとつの闇社会です。他の武将たちのように表には出ない、ひとつの隠然たる闇社会が、茶の湯の席を持つということを通して築かれていたのです。利休は、満身これ機密の塊のようでありましたから、当然、最後は消される運命でありました。利休が消される1年ほど前の利休百会記という記録が、全部残っております。本当は90数回ですが、利休百会記と呼ばれております。これには、誰を呼んで、どういう道具を使って茶会をしたかということが克明に書いてあります。一回の茶会で、せいぜい2、3人、多くても5人ですが、そこに名前を連ねている人たちは、先ほども申しあげましたように、後に歴史を飾る、またはその当時の歴史を飾る武将たちであり、豪商たちであり、政治僧であります。そして一番最後の茶会、徳川家康一人を呼んで行なわれた茶会が終わってひと半月後に、利休は腹を切らされております。この最後の茶会で、何が行なわれたかということですが、恐らく、その後すぐ起こった朝鮮出兵についての相談事だったと思います。秀吉はすでに全国を統一しておりましたから、国内には、もう攻めるところはありません。それに、今でいう老人ぼけも少しかかっており、誇大妄想狂になっていたようで、やがては朝鮮、明国、唐天竺まで攻めるといふようなことを言い出すわけです。

実は、これは、信長が、もう少し長生きしておれば、絶対に行っていたことだと思います。信長の軍事力は、先ほども少し触れましたが、非常に強力で、当時のヨーロッパの軍事力をはるかに凌駕していたようです。信長がああ調子で、鉄砲をもっと組織化し、軍隊の拡充を図っていたら、絶対に朝鮮出兵をしていたと私は思います。それに、船で攻めるといふことも実際にやっけていて、兵士の輸送能力も持っていましたから、あれで島づたいに、ずっと渡って行けば、第2のジンギス・カンになるぐらいの力は蓄えていたわけです。秀吉は、それを見ておりますから、自分にも出来るのではないかと考えたのでしょう。唐天竺を攻めたい、その手始めに朝鮮半島に軍隊を送りたいということになったのです。しかし家康を始めとして、秀吉に最初から従って来ている大名たちは、年も取っておりますし、あまり気が進まない。特に家康は、次に天下を取るの自分だと思っておりますから、朝鮮出兵に賛成しない。実は堺の町も、次に天下を取らせるのは、家康だと決めていたのです。というのは、豊臣家は次の跡取りがあまりにもひ弱すぎるといふことです。豊臣秀頼という人ですが、秀吉の孫みたいな子どもですし、それに淀君というおっかないお母さんが付いていて、それが盛んに口を出す。だから豊臣家はもう見限るといふのです。次はやはりいろいろなキャリアをもち、気配りもできる家康だといふわけです。

利休最後の茶会

利休自身も、結果的には最後になった茶会に家康を一人で呼ぶぐらいですから、彼と気脈を通じていたのです。恐らく、堺の武器や資本力を全部家康に渡すといふようなことを、堺を代表して、利休は言っていたのだと思います。それに気付きたいわゆる秀吉の子飼いの大名、石田三成や小西行長あたりが、これは少しやばいと思うのです。彼らは秀吉を自分の親同然に信奉しておりますから、お

とつあんの最後の夢をぜひ叶えてやりたい、朝鮮出兵をして、やがては明国へも出ていきたい、親父の野望を遂げさせてやりたいと思っておりました。しかし、利休をはじめ、堺はもう徳川に味方すると決めているのですから、秀吉がすることには、できるだけ協力したくない。家康も今さら、朝鮮半島に行って血を流したくない、下手したら自分も死ぬかもしれません。もう 2、3 年辛抱しておれば、自分の出番がまわってきて天下がとれる、それまではお得意の我慢で過ごそうというわけです。戦争は、絶対にしたくない。だから、家康、利休は朝鮮出兵、絶対反対なのです。ところが、若手の官僚にあたる石田三成や加藤清正などの大名たちも、やはり朝鮮に行きたい、そうすることで親父の夢を叶えてやりたいと思うのです。豊臣陣営にはそういう非常なせめぎ合いがあって、それも利休が調整するのですが、調整といっても、利休は家康側にくみして、自分の思い通りになるように努力するわけです。三成からすると、これは気に入らない。邪魔な利休を、先ずなんとかして消してしまいたいと思うようになります。それで、最後の茶会に家康が一人で呼ばれたときに、これは私の仮説ですが、三成あたりから利休に毒殺の圧力がかかったのだと思います。

今から 20 年ほど前、利休の死後 400 年のときに、映画が数本できました。その中の勅使河原宏さんが監督した映画「利休」の中に、次のような場面があって、えらく大胆なことをやるなあ、と思ったのを私はよく覚えております。利休最後の茶会に三成の使者が、毒入りの茶入れを、ずっと差し出すのです。これでお茶を立てて家康に飲ませるようにということです。利休が立てるお茶は、先ほど言いましたように、秀吉が立てたお茶ということになりますので、拒否することはできない。拒否すれば、豊臣政権に対する反逆と取られても仕方がないわけです。だから、問題は利休がそれを使うか、使わないかです。さすがに利休も、逡巡します、自分の命が惜しいですから。でも、最終的にはやはり堺の代表ということがありますので、その毒入りの茶入れを、ずっと後ろにやって、自分が用意していた毒のない茶でお茶を立てるのです。それで、家康は無事に帰るわけです。これは、勿論、映画の中の話ですが、私自身はかなり可能性の高い話だと思っております。

いずれにしても、その茶会のあと、ひと月ほどして、いろいろな罪状を付けられて、利休は切腹させられます。その頃、秀吉はどうしていたかという、もう、よいよに近い状態です。いろいろなことは、すべて三成がやっている、そして利休は切腹させられるのです。その後すぐに朝鮮出兵です。利休の抑止力が非常に強かった証拠です。利休が死んでしまうと、歯止めがなくなって、家康も、さすがに自分を出て行きませんが、配下の人間を遠征軍に送っています。それで、朝鮮出兵の結果は、皆さまご存じのように、最初のうちは勝っていましたが、次第に抵抗が強くなり、終には、さんざんな目にあって帰ってくるようになります。これが豊臣政権滅亡の引き金になって、家康の時代になります。

茶の湯の「わび・さび」はどのようにして醸成されたのか

その頃、家康が助かったのは、実は利休のおかげだということ、そして、そのために利休は命を落としたということが、皆に知れわたっていました。そこで家康が、ある気配りをします。当時、誰かが切腹させられると、その人だけに罪がかかるのではなくて、今でいう連座制、すなわち一族郎党が全部やられてしまうのです。一族全部が首をはねられても仕方がないのですが、利休は武士ではなかったのも、さすがにそうはならなかった。利休本人だけ切腹で、あとは、家屋敷、財産、茶道具なども全部取り上げられて、一家離散という状態になりましたが、命は助けられました。子どもたちは遠くへ流され、利休の跡取りは、蒲生氏郷という利休を非常に慕っていた大名が身元保証人となって、命だけは助けられて、会津へ流されました。当時の会津は大変なところで、堺からも遠いし、よくあ

んなところに流されて、我慢していたなと思います。そのままであれば、われわれの千家は、そこで終わりになっていたと思います。ところが、天下を取ることがほぼ確実になっていた家康が、ある気配りをしてくれます。それは、会津に流されていた利休の息子の千少庵に、お前の罪を許すから、京都に帰ってくるようにと、少庵召し出し状というのを書くのです。秀吉がまだ生きている時に、すごいことをしたものだと思います。普通ならば、たかが堺の一商人の茶人、放って置いても良かったわけです。ところが、家康は「利休は自分の命を助けて、天下を取れる機会を与えてくれた。これは利休のおかげだ。もし、このまま目をつぶっていたら、多分、世間は自分を冷たい人間だと思うであろう。今後、徳川幕府を運営する上で支障をきたすかも知れない。ここは一寸しんどくてもひと芝居打って、利休の子どもたちを助けて、家を再興してやらないといけな」というわけで、手を打ちます。そのおかげで、少庵は会津若松から帰ってきて、利休の家屋敷を返してもらい、家康のもとで、茶人として生活することを許されるわけです。世間はそれを見て「ほおー、家康はんは、偉いことしやりましたな。太閤はんの意志に反することやから、下手をすると大変なことになるかもしれんのに、それでも、命を助けてもろうた人に対しては、あんな気配りしやはるんやな」と、感心するわけです。これは家康に、ついていった方がいいなと思わせたわけです。それこそ、一時の竹下登さんみたいな気配りです。この家康の気配りのおかげで、私も、いま、こうやって、茶人として生きていられるわけです。それはともかく、この家康の気配りのおかげで、利休の孫の宗旦は、京都で落ち着いて茶の湯ができるようになったのです。その頃、徳川家はもう三代家光の時代になって、安定しておりました。徳川家では柳生流の剣道を将軍指南の剣道にして、柳生宗矩を1万石の大名に仕立てて権威付けをして、将軍指南という流儀にしました。同様に茶の湯も、将軍指南の茶道として権威を付けて、将軍家の専属にしたいということで、同じことなら、命を助けた利休の孫を呼びたいということで、京都で茶の湯をしておりました元伯宗旦に声がかかります。当時、将軍指南になれば、1万石ぐらいの大名になれて、権威がつきますし、食べるのにも困らない。宗旦は心を動かされるわけです。それまでは、宗旦はまだどこへも仕官しておりませんでしたから、こじき宗旦と言われるくらい非常に手元不如意でした。それで、江戸へ行くべく、今の瀬田の唐橋を渡ろうとするのですが、結局は引き返すわけです。それを2、3度繰り返しますが、最終的にはやはり行かない。京都に留まるのです。何故か？それは、権力の中枢に近づいて失敗した祖父利休の姿を充分に見ていたからなのです。宗旦が3度目に、瀬田の唐橋を渡って江戸へ行っておれば、多分、江戸幕府の崩壊とともに、このわれわれの家の茶道は終わっていたと思うのです。京都に残って、いわゆる在野の茶人としてやってきたからこそ、われわれの茶の湯は、かくもいろいろな階層に広く浸透していったわけです。その時はその方が楽でも、長い目で見ると、デメリットを受けることがあるという例を、私は身近に幾つも持っておりまして、よく参考にするのですけれど、この利休の孫宗旦の判断は、まさに、今、思うと正しかったわけです。当時は、ずいぶん非難もされ、あまり利口でない生き方だと言われていたかもしれません。でも、千家に代わって他の流儀が将軍指南になっておりますが、それはもう当時のかたちでは残っておりません。江戸幕府の崩壊とともに、全部滅んでおるのです。ことほど左様に茶の湯は、少なくとも明治維新までは、このように、権力の中枢に非常に近いところにありました。特に、利休前後は、まさに政治そのもの、政治の舞台そのものであったわけです。千利休は、今の学校の教科書では、安土桃山時代の芸術家として扱われ、わが国を代表する芸術である茶の湯を、わび茶の境地にまで引き立てた人と説明されております。恐らく、試験のときにもそう書かないと、よい点をもらえないでしょう。でも、これは実際とは大分違います。本当は、芸術家ではなくて、政治家です。それも陰で仲介・調停をする黒幕的、フィクサー的な政治家です。闇将軍と言ってもいいくらいです。ただ、利

休は、それがために、茶の湯自体に、次に述べるような、いろいろな工夫を付け加えております。戦国武将は学問・教養はなくても、頭脳の回転は非常に速いです。教育の機会さえあれば、恐らく、すごい業績を身に付けたと思われる非常に頭の切れる連中ばかりです。そういう人たちを相手して、心の奥底に入り込み、彼らの関心をこちらに向けさせなくてはならない。それで、道具の使い方、花の使い方というような演出には細心の注意を払って、完璧を期するわけです。そういういろいろな思いのこもった形式から、出来るだけ毒気を取り去り、残った部分を徳川 300 年の間に美化し、そしてなるべく、礼儀作法にも役立つような形式美に作り上げられていったのが、現代の茶の湯、茶道であると思われまます。茶の湯の精神を支える柱としての「わび・さび（侘・寂）」は、利休の後で静かに、時間をかけて醸成されていったといえるかもしれません。

太平洋戦争と茶の湯

今お話したような、茶の湯の魔性とも言うべきものは、徳川 300 年のあいだに形骸化し、全部取り払われてしまったように思われていたのですが、実はまだ残っていて、それがちらっと顔を見せた場面が、私に身近なところがありました。もう亡くなって 10 年近くになる、大正 2 年生まれの私の父親が経験をしたこととして、戦後かなり経ってから私に漏らしたことをご披露して、茶の湯の生臭さが、徳川 300 年のあとにもまだ残っていたということをお話しさせていただきます。

父のその経験は、昭和 18 年頃のことです。そのころの日本は、アメリカと戦争をしておりまして、一般市民は、「勝った、勝った、また勝った」と厳重に管制された報道に踊らされておりました。国民は、実際は負けているのに、勝った、勝ったと思って喜んでいたので。また、日本が勝つことを願っていたともいえます。実は、私どもの流儀は、利休の孫の元伯宗旦の次男坊の一翁宗守が元祖でありまして、彼は京都にいて、堂上公家によく出入りしていて、武士にはあまり近づかなかったのです。文化人や堂上公家、貴族階級、特に、近衛家とは、非常に親しく付き合っておりました。また、私どもの家は近衛家の茶頭もしておりまして、当時、総理大臣を務められた近衛文麿氏も、かたちのうえでは祖父の弟子になっておられました。

その近衛家の所有物で陽明文庫というのが京都にありまして、近衛家の財宝が沢山収められています。そこに、祖父が設計してつくった茶室がありまして、文麿公はそこへしょっちゅう来て、リラックスしておられたのですが、ある日、「茶事をするので、若宗匠、一人で手伝いに来ていただきたい」という連絡が私の父にあったそうです。私の父はそれを告げられたとき、困ったな、と思ったそうです。今日の私のお話の前のお茶会もそうですが、私共の専門家の若いものたちが、かなり来ております。お茶会は 1 人では出来ない、沢山の人間が後ろにかからないとできない。ですから、一人で来て欲しいと言われたときに、困ったことを言われるなと思ったそうです。でも、絶対 1 人で来て欲しいということなので、普段の何倍も苦勞して準備をして、一人で行って、当日のお客様を待ったのだそうです。勿論、公爵夫妻が亭主というか、ホストです。奥様はうちの親父と一緒に、水屋、すなわち準備室に入って、茶室とのあいだをいろいろと取り持っていたということ。親父は、勿論あくまでも裏方で、水屋にいたわけです。でも部屋の仕切りは、ふすま 1 枚、障子 1 枚ですから、中の話はまる聞こえです。しかも、正式の茶会ですから料理を運んだりするのに、しょっちゅう開け閉めをするので、中の人顔も見えます。正客が当時海軍におられた昭和天皇陛下の弟君の高松宮様、あとは、外務省の高官たちで、陸軍関係は誰もいなかったということです。それで、中からとんでもない話が聞こえてきたのだそうです。それは、日本国がどの国を通じて降参を申し込むか、近衛さんを特使としてモスクワへ派遣して、スターリンに斡旋してもらおうとか、パチカンを通じてするとか、ス

イスを通じて、あるいはスウェーデンを通じてするとか、結果的には、スウェーデンを通じて降参を申し込んだのでしょうが、とにかく、そういう話がなされている。親父はもうびっくりした、勝った、勝ったと思っていたのに、茶室の中から聞こえてくる話は、どこを通じて降参を申し込むか、それを何時するかという、降参の非常に具体的な話なのです。初めて自分1人で来て欲しいと言われた訳が分ったと言っておりました。若し、この茶会の話が漏れたら、大変なことになります。当時では、たとえ近衛公爵といえども、多分、反逆罪で逮捕されたと思います。うちの親父などは、それこそ特高や憲兵に捕られて、殺されたかもしれませんね。近衛公爵も、うちの親父はそんなことは絶対にしないという最大の信用のもとに親父を呼んだのだと思います。だから、絶対に一人で来て欲しいということだったのです。私の父は大学院で、30歳くらいまで歴史の勉強をして、いろいろな文書に接しておりましたので、茶の湯の負の面というか、魔性をよく知っておりましたから、戦国時代なら、今日のような茶会が続いたのであろう、茶室というのは、こういう話のし易い雰囲気なのだ、それも利休の場合は彼自身が演出したやり方で茶会をしているのだから、なおさらだということを理解して、なるほど利休は間違いなく殺されたのだと思ったそうです。さすがに、親父も、戦後もしばらくはしゃべりませんでした。しゃべるようになったのは、私が大学を出て、もう戦後25年は経ってからだと思います。外務省辺りが、あの当時の文書を公開し始めてから、親父もぼつりぼつりとしゃべるようになったのです。それも公の席ではなくて、少しお酒が出たような席で、利休の時代のことを聞かれると、その例として話しておりました。私にも聞かせておこうとして、「お前も聞いておけ」というようなことは、一言も言いませんでしたが、私のいる場で、よくそういう話をしていました。徳川幕府の時代に、次第に消えていったはずの利休時代の茶の魔性が、300何十年後の、しかも日本の国難の、もう本当にぎりぎりのところで出てきたのだということ、私に理解させようとしていたのかもしれない。お茶会での日本の降参の仲介の相談の後では、昭和天皇を、仁和寺か高野山へお移し申しあげて、出家をしていただくという話もしておられたということです。幸い、マッカーサーはそれをせずに、天皇の地位において、日本復興に役立てたということです。当時の日本は、そこまで考えていたということです。天皇にご退位・出家いただいて、今の平成天皇、当時の皇太子を、未だ子供でしたが、天皇陛下にするという、戦国時代にはよくあったやり方です。そのあとで、高松宮様は、実際に紀州の高野山へ登られたようです。実は、高松宮日記というのがありまして、それをNHKがテレビで放送したことがあります。そのとき、まさに、今お話したことが放送されましたので、ご覧になった方もおられると思います。また、高松宮様の日記も、宮様がお亡くなりになってから公開されていますので、私が、ここでお話していることが事実であることは、分っていただけると思います。この昭和18年の茶会では、利休時代の茶の湯の魔性が、何百年を経て姿を見せたということです。

終わりの一言

茶の湯の源流は、わび、さびとか、和敬清寂とかいうものとは、あまり関係のないところにあつて、「わび、さび」や「和敬清寂」という茶の湯の心といわれるものは、利休の後の平和な時代に、静かに、時間をかけて醸成されてきたものだという事を申し上げて、私のお話を終わらせていただきます。

畑田 茶の湯の本質を人間生活との関わりという観点からとらえた、大変興味深いお話を頂き有難うございました。それではせっかくの機会ですから、どんなことでも結構です、ご質問なり、ご意見なり、どうぞ。

畑田 先ほどの近衛文麿公のお話に関係のあることを一寸お話させていただきますが、昭和 18 年といいますと、丁度、アッツ島玉砕の年なのです。その頃、私は小学生ですが、大阪大学工学部で精密工学の教授をしていた私の叔父の一人が、私共の家に来たときはいつも、「この戦争は負ける」と言っていたのです。それは、墜落したアメリカの飛行機を調べてみて、これだけの技術力を持っているアメリカと今の日本が戦争をして、勝てるはずがないということでした。大声で言うので母は、はらはらしていましたが、叔父にとっては、うちの家は、そういうことの言える数少ない安全地帯であったのかもしれない。

それから、もう一人は、私の祖父の弟です。彼は新聞社に勤めて、ニューヨーク支局員をしていたことがあって、戦争中は中学校の先生でした。この叔父は、戦後間もなく病死したのですが、勇気のある男で、ニューヨークにいた頃の体験をもとに、「あんな国と戦争して、勝てる筈がない」と言っていました。彼は中学校の教壇からも、同じことを言っていたそうです。私はたまたま、戦後その中学校で勉強することになって、その時の数学の先生から、その話を聞いたのです。畑田というのは、そんなに多い苗字ではありませんので、この叔父が、ひょっとして私の縁続きの人ではないかと思い、話されたのです。「そういうことはあまり言われたい方がよろしいのでは」と言っても、「いや、私は生徒達に正しいことを言っているのだ」と言って、止めないので、周りの先生が、これも、はらはらしながら、守っていたということのようです。この数学の先生は、「畑田先生のことを思い、当事、先生の使っておられた机を使わせていただいている」と言っておられたのを、覚えています。

学校では校長先生が、もう少し頑張れば、必ず勝てる、とおっしゃるのですが、小学生の私にも、叔父や祖父の弟の言っていることの方が正しいように思えました。戦争の末期になりますと、日本のあちこちが、アメリカの B29 爆撃機による爆撃を受けるようになります。夜、大阪市が爆撃される様子をこの羽曳野から見ておりますと、サーチライトに照らし出された爆撃機に向かって、高射砲の弾が時々打ち上げられるのですが、飛行機の近くまで届くものは殆どない。私の親父は、高射砲隊にいたことがあるのですが、高射砲の砲弾は、飛行機に当たらずにそのまま落ちてきたら、味方に対して爆弾を落としたのと同じになりますので、敵機の近くまで上がったときに、炸裂するように設定したうえで、打ち上げるのです。でも戦争末期には、爆撃機の飛ぶ高さまで届くようにするための金属材料が調達できなかつたということです。それを見ていた我々銃後の国民は、戦争の終わりが近いことを、悟っておりました。先ほどの近衛文麿公の茶会のお話を聞いて、日本の中枢部が、あれだけの判断をしていたのなら、どうしてもう少し早くに戦争を終結に導けなかつたのかと思います。そうしておれば、原子爆弾の炸裂という、日本だけでなく、世界にとっても大きな不幸をもたらした事態だけは避けることができたのにと、今痛切に思うのです。家元の話に引き金を引かれて、戦争中の話をしましたが、これは、戦争を体験した世代の人間の責務として、こういうことを皆さんにお話して、聞いておいて頂きたいと思ったからです。それと、いくら、軍の中枢部が日本は必ず勝つと大声で言っても、いわゆる銃後の国民は、事態をほぼ正確に理解しはじめていた、でも何も出来なかつたのだということも話しておきたかったのです。

畑田 それでは、皆さん、今日の千宗守家元のお話についての、ご質問、ご意見どうぞ。

女性 A とっても楽しいお話、有難うございました。それで、最後に一寸お話になった「和敬清寂」ですが、これが茶の湯の源流ではないと言われたように思うのですが、私としては、茶の湯に関して、「和敬清寂」が一番よく聞く言葉のように思うのですが、どなたがその言葉を言い出されたのでしょうか。

千宗守家元 何事もそうなのですが、例えば、仏教では、法華経が一番古い経典だといわれています。そこに仏の教えが全部つまっているといわれていますが、法華経は仏さんの時代にできたものではありません。仏さんが亡くなられてからできた仏典です。どんな分野でも、創始者の言ったことが、そのまますぐに社会に伝わるわけではありません。しばらく時代がたって、創始者の考えやそれにまつわる具体的な内容・現象から抽出されたもの、そのものの本質、つまり、それをそれとして成り立たせている独自の性質というか、あるいは、それに関わる現象の根本原理が世の中に伝えられるようになるのです。そのものの内容を代表するスローガンと言っても良いのかも知れません。したがって、「和敬清寂」という言葉ができたのも、江戸に入ってからだと思います。最初にお話しした儒教の考えが日本に入ってきて、茶の湯を教育的に人々に伝える、茶の湯を修身に役立てようということになってから、「和敬清寂」ということが言われるようになったのだと思います。勿論、「和敬清寂」という言葉が、利休の茶の湯と無関係といっているではありません。利休の茶会の大部分が今言う「和敬清寂」とは無関係に近いことのために行われたものであったとしても、「静けさ」が利休の茶会での演出の大事な要素の一つであったことは間違いありません。この言葉は下から読んでいくと分りやすいのです。先ず、静かに、そして清らかに、次にお互いを敬う気持ちをもって、最後は和に繋いでいくというふうに解釈すると、分り易いと言った人があります。何事も、実戦から外れてくると、抽象的になってきます、理論が優先してくるのです。茶の湯も、ある種の社会的要請があって行われていた間は、和敬清寂というようなスローガンは必要なかったのですが、茶道という立場から茶の湯を教えるということになると、茶の湯の本質は「和敬清寂」であると言った方が、収まりがいいのです。今日の私のように、利休が誰の要請で、どんな目的で、どのようにして茶会を催したのか、というような話を1時間近くかけてやるよりは、ずっと簡単です。日本人は、お互いを身近に感じていて、和敬清寂と言われると、その意味を十分に理解していなくても、感性で分ったような気になってしまって、言い換えるとその日本語を単に記憶するだけで、「ああ、そうか、そうか、なるほどなあ。茶の湯と言うのはそういうものか」と、お互いが了解し合っているうちに、和敬清寂が茶の湯のスローガンになっていったのだと思います。

それから、「わび、さび」ですが、これは別に茶の湯だけではなくて、日本のいろいろな分野でよく言われる言葉です。俳句でもそうでした、芭蕉も、「わび、さび」を言っています。これは、「侘しい、寂しい」から来た言葉だと思います。日本人が、本来持ってきた心根というか、美意識なのでしょう。大学の講義でも、よく言うのですが、日本人は、もともと非常に陽気な、ラテン的性格だった。ところが室町の中頃になって、武士が政権を取り、宗教としての禅宗の影響が大きくなってくると、どちらかというともランコリックになってくる。常に死を意識するようになるのです。それまで、例えば、平安時代には、戦争など無かったので、お公家さんが実権を握っていて、武士はその番犬のように使われていたのです。奈良の仏教の法事の様子を見てもお分かりのように、ばあっと、散華が舞い、お坊さんたちはきんきらきんの、ほおずき（鬼灯）のような衣装をまとい、それから舞楽を舞い、後の世の法事のイメージとはほど遠いショーですよ。日本人というのは、もともとは、あんな風に、非常にラテン的であったはずなのです。だから、女性たちが、わりと表に出たのです。ところが、男だけが表に出て、女性が押さえつけられるようになってくると、つまり、腕力の世の中になってくると、侘びとか寂びという、どちらかというともモノクロ的な世界のことを言い出すようになったのです。日本人は、いまだに、それを引きずっていると思います。決してラテン的ではありません。「そちらの韓国の女性の方、如何ですか？ 韓国人たちは割合メロウ好きで、歌が日本の歌と似ているのではないですか？ パンソリというのがあるでしょう。あれと日本の歌謡曲は似てますね」

韓国の女性 「はい、かなり似ています」

千宗守家元 何が日本の音楽で一番人気があるかという、それは間違いなく歌謡曲です。日本人の心根を表すのは、決してベルカント唱歌ではない、歌謡曲です。あの何ともいえないこぶし、あれが、一番、日本人の心を打つのです。韓国のパンソリもそうではないでしょうか。ヨーロッパのポーランドと同様な歴史を背負わされた韓国の人たちの心の反映ではないかと私には思えます。

同じような考えで、茶の湯は、武家中心の抑圧された社会から生み出されたものということが出来ると思うのです。当時の歴史の産物ともいえます。一つの部屋に閉じこもって、別世界をつくるという茶会は、ある種のエスケープです、現実からの逃避の方法なのです。お互いがだまし合うのです。現実の社会では、武士という身分とか、それぞれの立場があるのですが、茶室の中に入ると、もうとにかく刀も外し、全て了解したうでだまされるのです。だから、みんな吐露してしまうのですが、茶室から出ていくとまた元へ戻る。そういうことに茶の湯は使われていたわけです。ある意味では、日本人の生活の知恵です。

今、完全な身分制をずっと引きずっている国はずいぶん多いのです。例えば、イギリスなどはその典型的な国です。一見、デモクラティックに見えているけれども、身分制は、いまだに厳然と残っています。この前も、ちょっと行ってきたのですが、女性たちにも、男性のナイト (knight) に相当するデйм (dame) という印が付いていて、レディと区別されています。食卓の席順もそのとおりに並んでいます。やっぱり、デймの付く人が、一番上に近いところに並んでいて、レディはそれより下ですし、ご飯食べるときも、それに対して非常に気を使っています。あれはもう、はっきりした身分制社会、格差社会です。だから未だに、議員の中の半分は世襲議員です。日本では、世襲が悪いとか、なんとか言っているけれど、イギリスは、日本よりも、もっと典型的な世襲なのです。日本は、しかし、それまでのしきたりを、革命を経ずに、一度にご破算にする、というようなことのできる国でもあるのです。今度の選挙による政権交替なども、まさにそうです。日本人は、そういう非常に融通無碍ともいえる精神をどこかに持っているのです。だから、ヨーロッパから見れば、ファー・イースト (極東) と言われるようなところでも、やっていけるわけですし、こんな優秀な科学者も生まれるのだと思います。畑田先生、そう思いませんか。

畑田 今お話になったことは、殆どすべて、その通りだと共感しつつ、聞かせていただきました。ただ、優秀な科学者は、日本でなくても生まれるのです。問題は、何処で、誰が、どんな研究をしたかということですから、どんな科学者が、どんな風にして、生まれているか、つまり日本の文化をしつかりと背負って、国際社会で活躍している科学者かどうか、ということだろうと思います。

千宗守家元 確かにそうですね。

女性 A どうも、有難うございました。最後にもう一つ伺いますが、和敬清寂という言葉の出典はあるのでしょうか。

千宗守家元 禅語などから選び出して、くっつけて作ったのだと思います。

それと、茶禅一味という言葉があります。お茶は禅宗と非常に深い関係にあるのです。先ほども申し上げましたが、堺の商人たちは、禅宗の学校へ盛んに出入りしたのです。これは言葉を学ぶためでもあったのですが、それだけではありません。禅宗に関わるものは、実は、当時、宗教的な意味よりも、むしろ最高のインテリゲンチアだったのです。禅は、日本にとって最新の学問だったのです。そこには、先進国の中国から入ってきた最新の学問があったのです。禅のお坊さんたちは、最高のインテリゲンチアであったわけです。だから、茶人も禅宗の寺に出入りしたのですが、それは必ずしも、禅宗の教義を学ぶためではなくて、学問上の理念性を取ったという面があるのです。茶禅一味といい

ますと、茶と禅とは同じ境地にある、茶と禅の本質は同じというように聞こえるのですが、そうではありません。茶の湯の本質は、和歌のやまと心です。四季のうつろいを愛でる和歌の世界、そういう遊び心が茶の湯の本質です。この季節を大事にする和歌の世界に、約束事を大事にするということも加えたいと思うのです。これが和敬清寂に近い世界です。禅宗では、四季の変化というようなことは言いません、そういうものは一切無視するモノクロの世界です。しかし、茶の湯が今まで続いたのは、日本人独特のやまと心、季節のうつろい、季節による色の変化、そういうものを楽しむ和歌の世界、遊び心があつたればこそ、と思うのです。茶の湯が和歌の心を十分に伝えてきたから、今まで続いているのです。これが茶の湯の本質に近い話なのです。茶の湯というと、すぐ座禅を組まねばならないとか、禅寺へ修行に行かねばならないとか言う人がいるのですが、それはちょっと皮相的な見方だと思います。

畑田 先ほどから、茶の議論性のお話が出て、この機能が茶の魔性につながったということなのですが、この議論性が発揮されるための雰囲気作りというか、背景には、和敬清寂ということばで表されるような心が流れていたのかな、と私には推測されます。千さんの今日のお話を聞いていますと、お茶というのは、民主主義というか、いろいろな意味で、デモクラティックなのですね。むしろ、イギリスやアメリカよりも、ひょっとするとデモクラティックなのかもしれない。

千宗守家元 アメリカだって、すごい格差ありますもんね。

畑田 その通りです。

畑田 先ほど言われた、いわゆる絢爛豪華、多色刷りの世界から、モノクロというよりは、墨絵の世界への移り変わりですが、その辺りで、やっぱりよく分らないこと、茫漠として分りにくいことを、その根本に到るまで、一所懸命に理解しようというような考え方が、生まれてきたのでしょうか。

千宗守家元 そうです。突き詰めるということです。日本人は案外、自分の興味のある分野について、突き詰めるのが好きなのです。

畑田 私などは、分からないから面白いな、いろいろ考えてみようか、という気になるのです。これは科学者の習性かもしれませんが、えらい難しいことを書いてあると思うものほど、何か一生懸命読もうとするよりも、むしろ考えようと思います。そういう点で、お茶は、考えることの根本である想像の世界を提供していただいているような気がするのです。想像の結果の集積が創造につながるわけで、科学にとっては非常に大事なことなのです。

千宗守家元 お茶の世界は、何段階にも層を持っているのです。複層的で、登り口は一つだけではない。アプローチする方法がいっぱいあるわけです。突き詰めるのもよし、享樂的になるのもよしというわけです。今のお茶は、そういう世界だと理解してください。

畑田 分かりました。それが生活の知恵の一つというか、生活のアートということになるのでしょうか。

千宗守家元 はい、そうですね。茶の湯は、踊りなどのようなパフォーマンスではない、いわゆる鑑賞芸術ではありません。生活芸術です。

畑田 茶の湯は生活芸術という観点から考えますと、若い人たちに、もっとどんどんと、茶の湯を浸透させていくのが、千さんの社会的使命の一つかなという気がするのです。また、そのための努力を、いろいろとおやりになっているように思います。立礼（りゅうれい）のお茶もその努力のあらわれの一つでしょうか。若い人たちへの浸透・普及は、茶の湯の今後の発展・深化にとって、非常に大事なことと思うのですが、この点について一言お願いしたいと思います。

千宗守家元 今、茶の湯は生活芸術とおっしゃいましたよね。茶の湯というのは、飲む、それからこういう部屋に座るというように、日常生活と、そうは変わらないことをするわけです。特に、戦前は、

自分の家に床の間があったし、畳もあった。畳の上に正座するのも当たり前であったわけです。お茶の席に違和感なく入れたわけです。ところが今は、畳の部屋のある家も少ないですし、床の間のある家もあまり無い。ましてや正座の習慣など殆どない。私は戦争の終わった昭和20年の生まれですが、戦争直後は、日本のことが全て否定されて、とにかくアメリカ万歳、日本の生活もアメリカのようになるべき、みんな車を持つべき、食事も今、高脂血症のもとになるといわれるようなものが、最高のご馳走のように言われていました。今、脂肪の多いものよりは、体に良いといわれているご飯、みそ汁などは、貧しさの象徴だったわけです。私ぐらいの年のものは、たとえ戦後の生まれでも、日本の昔の生活が、かなり分りますが、今の若い人たち、私の息子の世代、30代中ごろよりも若い人たちにとっては、日本間に入ったり、正座をしたりすることが、もう、エキゾチックなのです。外国に行くのと変わらないのです。だから却って興味を持つのです。われわれの世代のように古臭い、あんなことは嫌いだとは思わないのです。それはそれでいい、なかなかエキゾチックだ、正座、面白そうだ、やってみましょうよ、となるのです。勿論、続かないのですよ。続かないのだけれど、われわれみたいに、嫌いはいらないのです。子どもも、たまには正座するのが、日常生活からの気分転換になるというようなこともあります。そして存外、男たちが茶の湯をするケースもあるのです。時代の流れというのは怖いもので、あんまりこちらが迎合的にならなくても、こんな風にして、回帰してくることもあるのです。また、丁寧に説明すると却って逃げられてしまうという面もあります。

畑田 要 は、そういう機会をどのようにして、子どもや若い人達に与えるかということですね。

千宗守家元 そう、問題はそこです。機会です。そういう機会に接しない子どもが結構いる、というよりは、もう絶対多数でしょうね。機会に接することのできる子どもの方が非常に少ない。京都、大阪は、まだ比較的多い方です。今日も若い人に来ていただいているし、大学でもお茶の授業が成り立っているのです。

男性 A 堺市がね、利休ゆかりの地ということもあって、小学校の授業に、お茶を取り入れています。

千宗守家元 私も存じております。お茶の先生方が、出前授業で実技を教えておられると聞いております。もう随分長く続いているようです。その子たちが、やがて大きくなって社会に出たときには、お茶を取り巻く事情も少しは変わってくると思います。たとえば、今日は、大阪狭山市の帝塚山学院大学の茶道部の学生さんに、お茶席のお手伝いをしていただきましたが、彼らは、もうほんとに若い、今の子たちですが、ご覧のとおり、ちゃんと正座していますでしょう。

男性 B 茶の湯は本音が語りやすい場を作っている、そのために、別世界を作るためのいろいろな仕掛けがある、お互いに了解してだまし合うことができるというような、実に見事な方法を取っているのだというお話がありました。そうであれば、同時に、秘密を守ることが徹底されていないと、そういう場を作るのが難しいと私は思うのですが、如何でしょうか。

千宗守家元 そのとおりです。

男性 B 茶の湯には、お茶席で知った秘密を外でしゃべらない掟があるということでしたが、今、そういう別世界を作って、了解してだまし合うというような場は、茶会以外にあるのでしょうか。

千宗守家元 ゴルフです。政治家は盛んにゴルフをしますでしょう。ある大臣などは、がんて死にかかっている、ゴルフに行っていました。あれは4人でやる、解放性の密室です。キャディーは遠ざけられますので、周りには人がいません。ゴルフはもう、完全な密室で出来るわけです。解放性で、周りが良く見渡せるだけに、もう自分だけだという気持ちが余計に強くなると思います。だから、今の政治家は、みなゴルフをします。昔は茶の湯だったのです。その頃は身分制がありましたから、やたらな者は近づけないようにすることが出来たのです。先ほど申し上げました近衛公の茶会でも、

うちの親父のような、完全に安全な者だけをそばに置いたのです。だから振る舞う方も、近衛公の奥様とうちの父だけだったのです。水屋の振舞い方が2人だけでは大変だったのですが、そういうふうにして、機密を守ったわけです。茶室は完全にガードされていますから、見られることはないのです。

畑田 今はお茶をそういうことに使うことはないのですか。

千宗守家元 殆どありません。

畑田 それは、お茶が時代とともに、進展というか、深化してきたということでしょうか。

千宗守家元 ベールを脱いできたといった方が良いと思います。

畑田 ベールを脱いできた、つまり、ベールを脱いで、深いところが見えてきたということですね。文化は時代とともに変わっていきますけれども、お茶は非常に良い方に変わってきて、その美しさが表面に現れてきたということですね。

千宗守家元 そうそう、おっしゃるとおりです。今までアクセサリーのように扱われていたというか、お茶会の結果だけが重要視されていたのが、その本質が見えるようになったということでしょうか。

畑田 お茶の精神から考えて、結果よりもプロセスの方が、大事と考えてもよろしいのでしょうか。

千宗守家元 本来はそうです。しかし、これはお茶に限ったことではありませんが、どのような文化も、時代背景が醸し出す影響を強く受けるわけです。日本は、もう外国と戦争はしませんから、茶会を開いて、そんな物騒な相談をする必要はもうないわけです。でも、その時代の要請が全く無くなれば、文化は退化していきます。

畑田 ということは、今の平和な時代の社会の人たちが、お茶に何を求めているかということになりますね。日本の戦後の民主主義社会は、いろいろな問題を孕みながら、少しずつ成長してきていることは間違いないと思うのです。民主主義の本質は、国民の全てが、先祖の残してくれたものを、いつくしみつつ活かして生活するとともに、自分達だけではなく、これから生まれてくるであろう人たちも含めて、皆がより幸せになるためにはどうすればよいのかを、一所懸命に考えて、生活することです。和敬静寂の心を持って、仲良く楽しく語り合う茶の湯の出番ともいえます。茶の湯の本質と機能を生活芸術として生かしていく絶好の機会だと、今日のお話を聞いて思うようになりました。一般市民が、たとえ少しずつでも、勉強すれば、社会も少しずつ良くなっていく、そしてお茶も良くなっていくということなのではないでしょうか。

千宗守家元 そう信じて頑張りましょう、先生！

畑田 それでは、神崎さん、経済人としての立場から、お茶の精神について一言いかがでしょうか。

神崎 今日、私どもが理解しているお茶の世界とはまるで違う歴史的な背景を聞かせていただきました。ご子孫の先生がおっしゃるのですから、非常に説得力がございまして、興味深いお話でした。去年の10月から、世界中が、特に経済的に、おかしくなっておりまして、われわれ日本人も、どちらを向いて走って行けばいいのか、分らない状態です。世界中がそういう状況だと思います。ビジネスの世界から見ますと、そういうことですが、それでも日本のお金持ちは大変豊かで、格差がどうのこうのというようなことを、マスコミは話題にしております。しかし、私はこの頃、本当に日本的なものが、これからもっと生かされていくべきであると思うようになりました。戦後、世界中がアメリカ的な生活に憧れて、それに追従してまいりました。日本もその典型的存在の一つだと思いますが、そろそろ日本らしさを強く標榜してもよいと思うのです。われわれは別に、それで中国と競い合ったり、世界中と競い合う必要はない、これからは日本らしさを生かしていけば良いと思うのです。今日、先生から1時間にわたってお話を伺いました茶道の世界は、本当に日本的なものの一つだろうと思います。それから茶道の世界は、日本の古くからの社交の世界として、政治的にもいろいろと利用され

たと伺いましたが、そういう自己の立場を離れて、お互いの親睦を図るといいますか、本当にいろいろな話ができる世界が、これから大事な世界になるのではないかと思います。お金の計算やお金もうけの方法よりも大事になると思うのです。日本の茶道が、一般の人たちに、もっともっと理解をされるように、先生のご活躍を願う次第でございます。

千宗守家元 ご丁寧なお言葉、有難うございました。

畑田 大変良いお言葉をいただきました。最後に、今日のゲストのお一人の帝塚山学院大学の元副学長、三浦教授に、一言お願いしたいと思います。

三浦 三浦でございます。今日は家元にお誘いいただいて、参加させていただきました。みなさん、熱心に家元の講義を聞いておられまして、私も感心して拝聴いたしました。家元には、お茶の講義を私どもの大学で、茶の歴史および日本の文化の中での、茶の湯の歴史について、ずっと講義をしていただいております、私はそれを毎回聴講しているものですから、家元のお話は、もうずっと理解しているつもりでございましたが、今日はまた、秘密の話、茶の湯の魔性の話をお聞きしまして、茶の湯はやっぱり奥が深い、歴史も深いということを感じました。貴重な機会をいただき、有難うございました。

畑田 それでは、あらためて、素晴らしい午後も過ごさせていただきましたことを、感謝申し上げます、本日の集いを閉じさせていただきます。千宗守家元さま、皆さま、本当に有難うございました。

千宗守家元 有難うございました。(拍手)

本稿は、2009年11月14日、大阪府羽曳野市郡戸の登録有形文化財畑田家で、畑田家住宅活用保存会主催、大阪大学総合学術博物館協賛のもとに開催された文化フォーラム「お茶と日本人の心」での、武者小路千家第14代家元 千宗守氏の講演と講演後の質問・討論の録音記録をもとに、畑田耕一（畑田家住宅活用保存会、事務局長）と矢野富美子（同、幹事）が編集し、千宗守氏の校閲を経て、作成したものである。